ふくろう横町のなかまたち

木暮正夫・作／かみや しん・え

創作子どもの本　5

ふくろう横町のなかまたち

木暮正夫

金の星社

ふくろう横町のなかまたち

創作子どもの本5

1975年1月／発行©

著者／木暮正夫

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4—3
電話／東京03—861—1506(代表)
振替／東京0—64678

印刷・製本／株式会社　ケイ エム エス

乱丁落丁本はおとりかえ致しますので，お求めの書店または本社へお申し出願います。

913　木暮正夫
ふくろう横町のなかまたち
金の星社　1975
173P　22cm（創作子どもの本5）

基本カード記載例

8393—041051—1406

はじめに／木暮正夫

東京のはしっこのほうにね、ちっちゃな商店街があるんだよ。『ふくろう横町』っていうんだ。ふくろうがいるわけでもないのに、どうして『ふくろう横町』なんてなまえが、つけられたのかな？

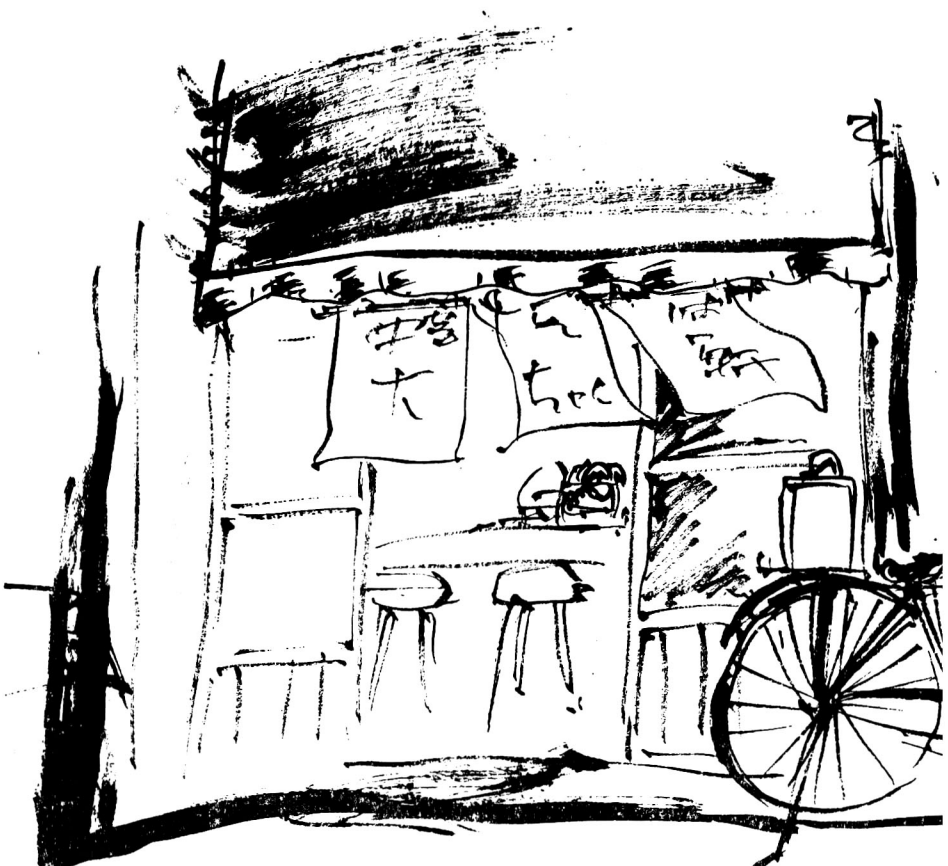
この横町に、ラーメンの店があるんだ。小さな店だけど、なまえは『大ちゃん軒』――。がんこなとうちゃんと、ほがらかなかあちゃんと、三年生のツトムと、一年生のさち子がいてね、げんきにやっているよ。

もくじ

ねぼうをした朝……6
子ねこのおしっこ……27
がんこなとうちゃん……47

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ユッ子の家出……74
空の青い日……106
子ねこあげます、もらいます……127
だぶだぶの白衣と口ぶえ……149
あとがき……171



作者・画家紹介

木暮正夫（こぐれ まさお）

1939年，群馬県に生まれる。日本児童文学者協会，日本子どもの本研究会々員。おもな著書に「時計は生きていた」「オリオン通りのなかまたち」「焼きまんじゅう屋一代記」「くるみやしきのにちようび」など多数がある。

現住所――東京都久留米市神宝町
2－6－14

上矢 津（かみや しん）

1942年，東京に生まれる。1970年，第五回ジャパンアートフェスティバル受賞。1972年，第八回東京国際版画ビエンナーレ鎌倉近代美術館受賞。1973年第十回リュブリアナ国際版画ビエンナーレザグレブアカデミア賞受賞。
おもな児童書に『グンカンドリ・アウダ』『たろうの日記』など多数ある。

現住所――杉並区下井草5－2－5
井荻マンション402号

創作 子どもの本 5

ふくろう横町のなかまたち

木暮正夫

1　ねぼうをした朝

鼻が、むずむずしていた。くしゃみが、でそうでいてでない。

三月九日だった。校舎の日かげや、校庭のへいぎわには、おとといの雪が、うすよごれたままのこっている。

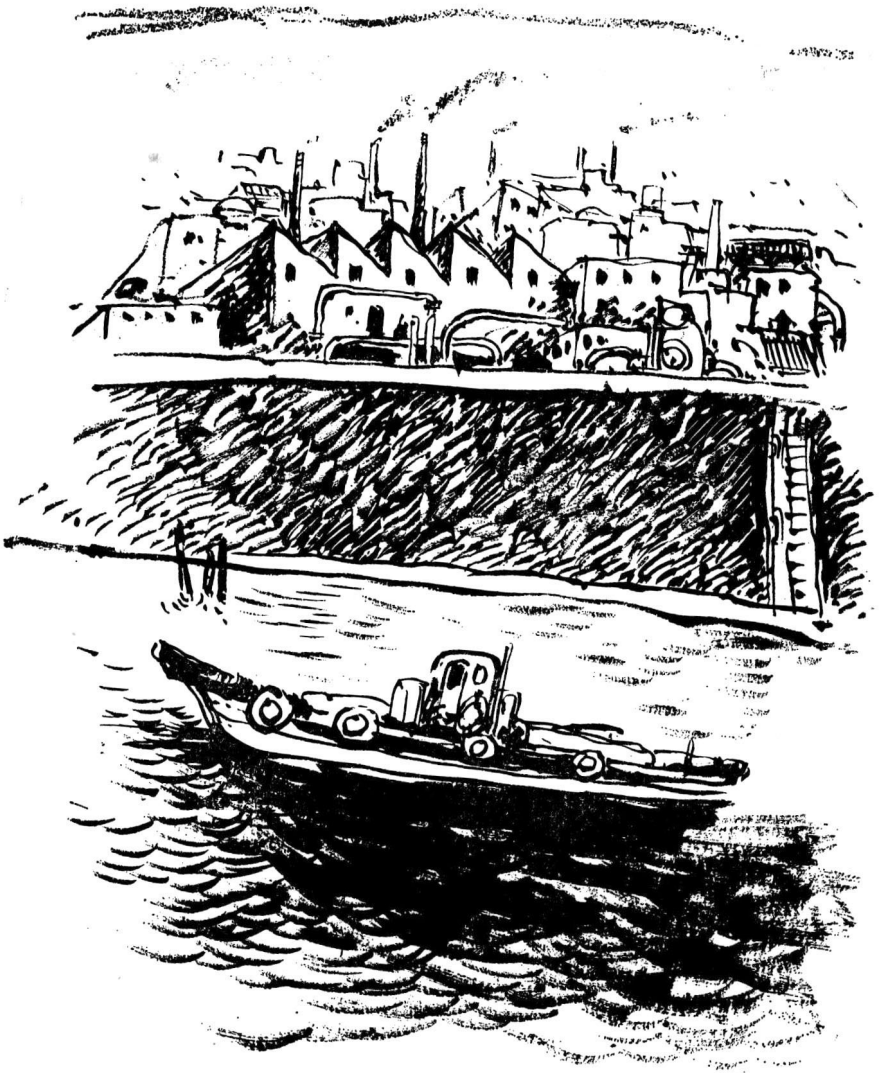
学校では、インフルエンザがはやっていた。学級へいさをしているクラスが、五つもあった。この中に三年三組は、はいっていない。カゼをひいて欠席しているのは、まだ四人だけだった。それでざんねんながら学級へいさにはなってくれない。

ことしの東京には、ちょびちょびと、雪の日が多かった。もう七、八回ふった。けれど最高につもったときでも、十五センチがやっとだった。東京の雪は、すぐによごれて、消えてしまう。

ストーブひとつの教室はさむかった。ぼくがカゼをひきかけているせいかもしれない。すこし、頭もいたい。

ぼくは校庭をながめていた。たいくつだから、空もながめた。

いまにもまた、みぞれかなにかぱらついてきそうな、どんよりとした空もようだ。校庭のむこうには、町工場の屋根がならんでいる。放水路のていぼうにそって、いろいろなかたちの屋根が見える。小さな町工場やメッキ工場。電線工場。大がかりな機械をとりつけて、うるさい音をたてる生コンクリート工場……。放水路を、うんぱん船がのぼっていく。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三時間めのおわるまえから、ぼくはおなかがからっぽだった。さむいと、よけいにおなかがすくようだ。そろそろ、工場の十二時のサイレンが、鳴りだしてもよさそうなころだった。このサイレンが鳴れば、まもなく、四時間めがおわる。そして、ふつうの日なら、給食がはじまるのだが、きょうは土よう日。

四時間めのおわりをつげるチャイムが鳴っても、土よう日なので、すぐに教室をとびだすわけにはいかない。教室のそうじがあるし、反せい会がのこっている。そのうえぼくは、日直当番にあたっていた。まっているときのサイレンは、なかなか鳴らないものだ。四時間めは算数だった。ぼくのきらいな課目だから、いっそう長く感じられる。

ぼくはボンヤリとした頭で、朝起きたときから、学校につくまで

の、ツイてないできごとを、あれこれ思い出していた。こんなにツイてない日もめずらしい。

ぼくはけさ、ねぼうした。

八時二分すぎまで、段ベッドのフトンの中だった。サイクリングのゆめを見ながら、ぐっすりねていた。『ジュニア・セブン号』の自転車で、さっそうと海べりを走っているゆめだった。

ゆうべ、セットしておいためざまし時計は、七時三十分に鳴りだした。ぼくは、ベルがジリリンと鳴ったとたんに手をのばして、めざまし時計をだきかかえて、ベルの音をおさえこんだ。

〈あと五分……〉

そのつもりが、三十分ちかくもねてしまった。ねがえりをうったら、ひじにコツンあたったものがあるので、つかみだしてみると、

めざまし時計だった。ぼくはフトンの中に、めざまし時計をひっぱりこんだことなど、おぼえてなかった。

「たいへんだ、さちっぺ、起きろ！」

ぼくは、めざまし時計の針がさしている時間にびっくりして、がばっとフトンをはねのけると、ベッドの下の段で、ぬいぐるみをだいてねていた妹のさち子にいった。さち子は起きあがったものの、フトンの上にすわりこんで、きょとんとしていた。

「ねぼけてんなよ、さちっぺ。これを見ろ、八時すぎてんだぞ！」

「…あたし、ベルが鳴らないから、日ようかなって、おもってた。」

さち子は目をこすりながらいった。

「日ようはあしたじゃないか。しっかりしろよ。」

「にいちゃんが、わるいんだよ。めざまし時計があるのにさ……。」

「だれがいいとか、わるいとかいってるばあいじゃないんだよ。早く、ねまきをきがえて、顔を洗って、さっさとしろよ。」

ぼくは、かなりあせっていた。あわててパジャマをぬいだら、ボタンがふたつもはじけとんでしまった。さち子は「ふあーっ」と、女の子らしくもない大あくびをしてから、やっと段ベッドをはいだした。とてもじゃないが、さち子のペースにあわせているわけにはいかなかった。日直当番は男女ひと

りずつで、一時間めのはじまる十分まえまでに、教室についていなければ、いけないというきまりになっていた。

教卓にハタキをかけたり、くずもの入れのゴミを、焼きゃく炉へもっていったり、先生が教室にやってくるまえに、クラスのみんなにあいさつをするのが、日直の朝のやくめだった。やくめがぶじにできないと、その日の反せい会でみんなからなにをいわれるか、わかったものではない。とくに女の子たちは、日直のしごとぶりに、もんく

をつけたがってうずうずしているのだからたまらない。
ぼくは、口がうまいほうではないので、女の子たちをいい負かすなんてげいとうはできない。しどろもどろしてしまって、口がまわらないのだ。日直の朝にちこくできないわけは、そこにあった。
女の子たちにいいこめられるのは、ていさいがよくない。
ぼくと組む日直のコンビは、ユッ子だった。阪本有紀子といって、ぼくとおなじ『ふくろう横町』に住んでいた。ユッ子の家は薬局だった。おもに漢方薬（漢方は中国の医学で、それにつかうくすりのこと）をあつかっている店で、『大黒堂』という古めかしいかんばんをかけていた。
ぼくがランドセルをひっさげて、だだだっと階段をおりていくと、かあちゃんの顔が下からのぞいていた。
「ツトムは、休みじゃないのかい？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com